

毛利敬親公の懐刀 楫取素彦

*楫取素彦はNHK大河ドラマ「花燃ゆ」の主人公の一人です。

*（ ）内は筆者注記

山口県地方史学会会長 小山良昌

はじめに

楫取素彦は文政十二年（一八二九）、萩藩医松島瑞幡の次男として萩城下町の北浦海岸にほど近い魚棚沖町で生まれ、幼名を久米次郎と称した。名は哲、諱は希哲。通称は久米次郎、或いは内蔵次郎と称し、号は士毅又は彝堂などと号した。

天保十一年（一八四〇）六月、一二才となっていた久米次郎は、明倫館の儒官で大組（萩藩の中核をなす藩士階級）に所属した小田村吉平に請われて養嗣子となり、伊之助を称することとなった。すなわち、寺社組の医者松島家から儒学を家業とする小田村家へ養子に入ったの

である。そして藩校明倫館で腕を磨き、やがて義父の跡を継いで明倫館の儒官となった。

松下村塾の後事を託される

嘉永四年（一八五二）江戸番役として江戸滞在中、吉田松陰との交友が始まった。松陰は

「老兄の気力、詩力、酒力はわが及ぶ所に非ず」と小田村を評し、松陰から一目も二目も置かれる存在であった。

嘉永六年（一八五三）四月、二年間の江戸での番役を終えて帰国した小田村は、重建された明倫館に復職し、

明倫館舎長書記を兼ねて再び講師見習いを務めることとなつた。その一方で、帰国して間もなくと思われるが、吉田松陰の妹の寿ひさ一五歳と華燭の典を挙げた。小田村二五歳の時であつた。この小田村と寿との結婚の知らせを受けた遊学中の松陰は、

「寿妹儀 小田村氏へ嫁せられ候由 先々珍喜此事御同慶仕候 彼三兄弟（兄松島剛藏、弟小倉健作）皆読書人 この一事にても弟（松陰）が喜ぶ所なり」（吉田松陰書翰）

と書き送り、二人の結婚を祝福している。また松陰は「妹寿は性質が敏慧（聡く賢い）」とも書き、読書家の伊之助とは似合いの夫婦とも書いている。なお、壽の妹文は久坂玄瑞に嫁している。

松下村塾で多くの人材を育てた松陰は、安政五年（一八五八）再び野山獄へ入獄した。その際、村塾の行く末を心配する塾生に対し、

「投獄後は妹婿小田村伊之助と申す儒官これを主つかさどり居候 久坂玄瑞もわが妹婿なり（中略）此三人共村塾に

て小生の志を継ぎ候也」

と書いて、小田村に塾の後事を託している。

やがて、松陰の東送の日が近づき、松陰の元に門下生が集まるなか、松陰は村塾の将来について、

「村塾には彝堂（伊之助）先生在り 何ぞ吾が言を待たんや 塾生の大眼目は唯だ先生を尊崇するあるのみ」

と伝え、松下村塾の後継者に小田村を指名しているのである。

密命を帯びて支藩主を説得

安政六年（一八五九）、小田村は所属する大組の儒官の中から拔擢され、手廻組に昇格して藩主毛利敬親の侍講となつた。手廻組とは別名を御手廻組とも呼び、常に藩主の側に仕える秘書的な存在であつた。従つて、在職中だけではあるが、小田村身分は最上級家臣である「寄組」と藩士の中核をなす「大組」との中間に位置した。

萩藩の基本精神は、毛利家が代々「勤王」であること

から藩是も当然「勤王」であり、毛利家の勤王振りは、天下の周知する所でもあった。

文久二年（一八六二）七月、萩藩は京都藩邸での御前会議で、天皇の意向に添った「破約攘夷」へと藩是を転換した。これは幕府の外国和親の方針に反する決定で、長府や岩国の支藩主がこの藩是に従うとは思えなかつた。そこで、藩主敬親は小田村に支藩主への説得に当たさせたのである。小田村の説得の様子について、後日「樞取素彦翁談話」（要旨）で次のように述べている。

「その時分因循論（俗論派）と云うのが岩国は多くて、吾輩が八方説き廻つて、監物公（吉川藩主）にも會うて激烈に論争をした。それで、本藩の命だからと云うので奉ぜられた。

長府も満朝俗論で困つたが、左京亮（藩主元周）は重病だと云うて対応に出さぬ、私には本藩の命を奉じて来たのだから、長府公が一息たりとも御生命のある間は、御面会して命を伝えなければ

ならぬと云うて、到頭病床でお会いなさつた」

かくして、十二月、長府、岩国両支藩への説得訪問の役を無事終え、京都藩邸へ帰着して復命した小田村に、その成果に満足された敬親公は小袴を下賜してその労を賞された。

元治元年（一八六四）の正月早々、小田村は長崎間役を拜命して長崎へ出張し、ほぼ二ヶ月間滞在して開港地での異聞、夷船の出入り、異人の行動などを具に窺つて調査し帰国して報告すると、敬親公より「吉岡紋付」を下賜されて賞された。休む間もなく三月には再び長崎に舞い戻り、約半年間滞在して外国人から銃砲購入に関わる仕事に従事していると、同年の七月十九日、京都に於いて三家老に率いられた長州兵が禁門の変（蛤御門の変）を起こして敗北した。その戦鬪で、義弟の久坂玄瑞は負傷し、鷹司邸内で自決した。享年二五才であつた。

この禁門の変を起こした長州藩に対し、江戸幕府は萩藩の江戸屋敷に在留する者を幽閉し、次いで全国の諸藩

に対して第一次の征長令を發した。幕府直轄領である長崎の地も、長州藩士にとっては不穩な雰囲氣に包まれたのであろう、小田村は任期半ばであったが同年八月、急遽長崎を出立し、イギリスを中心とした四国連合艦隊が馬関海峡を襲撃した直後の下関を経由して帰萩した。

薩長同盟の端緒

この禁門の変を起こした長州藩に対し、幕府は第一次の征長令を發した。

同年九月、小田村は藩主敬親の実妹孝姫の嫁ぎ先であった宇和島藩主伊達大膳大夫宗徳の元へ、敬親公の御内命を帶して派遣された。嫁いだ孝姫は既に逝去されていたが、元親族の好^{よし}として義弟であった伊達藩主に敬親公の心情を訴えたと思われるが、さすがに伊達藩主の応対は厳しいもので、説得は成らなかつたようだ。

萩藩では尊王を旗印とする正義派政権が進めた施策が破綻し、幕府に謝罪恭順の意を表する俗論党が政権を掌握し、三家老の首を幕府へ差出し、四參謀七政務員を処

刑した。この中には、小田村の実兄で藩内洋学の第一人者松島剛蔵ら有為の人材が多く含まれていた。

御内命を帯びて東奔西走した小田村の身を心配された敬親公は、小田村に改名を勧められ、以後「小田村素太郎」と称する事とした。しかし、棕梨藤太を首領とする俗論党政権は、改名した小田村を許してはくれなかつた。文久二年七月以来の小田村の行動が、正義派の志士と氣脈を通じていたと云う疑義により、小田村は先ず「親類預け」の措置が執られ、次いで十二月には、同志と共に野山獄に投獄されたのである。小田村の命は正に風前の灯火であつた。

元治元年（一八六四）十二月、高杉晋作は三家老らの処刑を聞き、長府の功山寺に挙兵して俗論政府に叛旗を翻した。この挙兵を契機に正義派を奉ずる奇兵隊などの諸隊と藩府軍との間に内訌戦が始まり、慶応元年（一八六五）二月には正義派軍が勝利して再び藩政を奪還し、小田村は無事野山獄を出獄した。

正義派政府は藩是を武備恭順に改め、表面上は幕府に

恭順、藩内では密かに武備の充実に努めて、反幕府の態勢を堅めていった。

出獄後、小田村は再び藩主の密命を帯びて、太宰府へ移されていた五卿の許へ赴いた。その太宰府で小田村は坂本龍馬に会って話し、坂本を木戸孝允へ紹介している。前掲『楫取素彦翁談話』には、(要旨)

「太宰府へ行く時分には 既に其事(薩長同盟)はど
うしてもやらなければならぬ、と言う話があつて、太
宰府へ行く途中大山格之輔(初代鹿児島県令)と会ふ
て茶店で話し、「私(大山)はこれから京都へ上がるが、
毛利家の方の考えはどうか」と云うから、「其れは格
別はない、どうしても薩長が反目しては事が行わ
れぬ、どうかして協力しなければなるまいと思うから、
其の辺は安心するがよい」と云うて茶屋で別れた。
太宰府に着くと安芸守衛という人が坂本龍馬に会つて
くれと云われた。坂本は「斯様に薩長が反目して
は天下のことが思うようにならぬ、木戸に会つて話そ

うと思う、貴様に仲介して欲しい」と。そこで、「そ
れは容易なこと、貴様の考えも私の出先の考えも同一
の事である。木戸も格別の異論はあるまいと思う」私
からすぐ木戸宛に手紙を出した処が、返事が速やかに
来て、「坂本なる者に来てでも宜しい云うてくれ」と手
紙を寄越したから、その手紙を坂本に見せて、薩長連
合の端が啓ひけたようなものだ」

幕府との折衝・拘禁

徳川幕府は、恭順の意を表した山口藩に対し、隣藩の
広島浅野藩を介している指示してきたが、慶応元
年(一八六五)二月、正義派が復権を果した山口藩内
では幕府の命に服さず、幕府に対する伏罪使の派遣にも
応じなかつた。そこで幕府は、六月には徳山、岩国両侯
に対して上坂するようにと出頭命令を下したが、両侯が
病気を理由に断ると、七月にも再度両侯に上坂命令が下
されたがこれも断つた。そこで幕府は、岩国藩主らが病
気なら長府藩主毛利元周、清末藩主毛利元純を代わりに

上坂するように命じたが、山口藩は元周らも病氣であると回答し、幕令に応じなかった。そして、敬親公は長府藩をはじめ四末家の藩主を山口藩庁に集めて協議した結果、幕令には応じないこととし、改めて広島藩を介して陳情書を呈することとして宍戸備前親基、小田村らを広島へ派遣した。

これまで記述したように、敬親公の御密用を携えて縦横に活躍する側儒人小田村に対し、八月には、藩は素太郎の儒学の家業を免じ、改めて大組に属して二本差が許される藩士（いわゆる「武士」）に昇格させた。

十月、幕府との応接のため、藩の重役井原主計、宍戸備後助、その付添役として小田村が広島へ派遣された。幕府は長州再征の口実を得ようと、大目付永井尚志が宍戸や小田村らを喚問し、七時間におよぶ厳しい審問、尋問を行ったが、顕著な成果を上げることが出来なかった。そこで、やむなく永井は本営の大坂に帰り、復命に基づいて山口藩の処分案を検討した。（江戸時代は大坂と書く）

翌慶応二年（一八六六）正月、老中小笠原長行が広島

に赴き、山口藩に処分を申渡すため、山口藩の支藩主及び家老を広島に出頭するよう命じた。ところが、山口藩はこれまた容易に応じず、小田村を支藩主および家老の名代として広島に赴かせた。ところが、幕府側は九日には小田村らを不審の点があるとして広島藩に拘禁したのである。

この小田村らを拘禁した幕府の卑劣な行為に対して、長州藩内では大いに憤慨し、逆に打倒幕府に火がついた。この拘禁は、小田村にとっては二度目の入獄であった。

四境戦争（第二次長州征討）……芸州口の戦

かくして、長州軍対幕府軍の戦闘が慶応二年六月七日に開始された。

幕府による第二次の長州征討戦争を、長州藩では四境戦争と称しているが、長州軍は大島口、小瀬川口（芸州口）、石州口、小倉口の四境の各地で、藩政府軍と奇兵隊などの諸隊、及び長府藩を初めとした四支藩兵二万人弱が組織化され、一丸となって戦い、幕府軍を中心とし

た十五万人の諸藩連合軍に対して善戦した。幕府軍の本陣が広島に置かれていたことから、直近の岩国小瀬川口では幕府軍の主力が配備されており、戦争の決着は容易に決しなかった。

そこで、広島に滞在していた老中本庄宗秀は専断を以て山口藩との停戦を画策し、六月二十五日には拘禁中の宍戸、小田村両名を呼び出し、帰藩して停戦を周旋するように要請した。小田村らは本庄の要請は受け入れられないと断つたが、両名の周旋に一縷の望みを託した本庄は両名を解放したのである。小田村らは七月三日には無事山口に到着し、老中本庄の周旋希望について報告、検討したが、山口藩はもとよりその策に乗らなかった。

帰藩した小田村は、来藩中の薩摩藩黒田清隆、篠原国幹の強い希望を受入れ、敬親公の許可を得て激戦が続く芸州口の戦場に案内した。その時の生々しい戦場の様子を、前掲した『楫取素彦翁談話』の中からその一部を紹介しよう。(一)内は小山注

「吾輩と広沢(眞臣)は即座に心得ましたと云うて出かけたけれども、その時分黒田と篠原は初めてミネール筒が舶来した時分で、二人は短ミネールを各々持つて居った。それが撃ちたくてたまらぬのだ。途中で鳥を撃つたりなにかしておったが、滅多に撃つてくればドモならぬ。ご案内はするけども危険なところにはやるなという君命であるから、是非向こうへ行ったら遠方から眺望していてくれると両人に云うと、宜しうござると云うような事だ。それから玖波は皆どこの家も立ち去つて人氣のない豪農の空き家のような所へ入つて、彼等と同宿して居った所が、一夜幕府の方から一時休戦してくれと云う事で、芸州(広島藩)が間に立つて、其れは承知だと云うことになつた所で、吾輩の建議に、休戦しようと言束はしたけれども、今日の場合に於いて今一度押し込んでおかにやあならぬ、と云うた(云った)ところが、今の井上伯(井上馨)なども監軍として来て居つたが、井上をはじめとしてそれは宜しかろうと云うようなことだ。

それから、一夜八月の八日か九日だったろうと思うが、その夜は大風大雨でこの風雨に乗じて夜襲をやるうと云うことになった。それから夜明け前に、玖波の何とか云う峠に榊原（藩）あたりの幕府方の兵が居る。其所へドンドン打ち込んだ。所が休戦の談判が折り合ったと云うので大安心をして、酒饌しよせんを賜ると云うようなことで大酔して居ったところへ撃ち込んだものだから、今度は散々であった。それから、その時分に黒田と篠原が「此度はお前方には御迷惑をかけぬから、戦争の景況を観に行きたい。許してくれ」と云う。許すという訳にはいかぬが、勝手にせえ、と云うようなことで、各々「ミネール」が撃つてみたくてたまらぬので出て行つたが、先生等が行つた時分はもう戦争が済んでおつたが、その前夜に安心で酒宴を開いた後だから、酒は残してある。肴もある。というようなことで、此方の兵卒などが皆それを喰うて大酔になり、敵の生首を取つたのを葦山笠の中へ一つ宛入れて、持つて戻るといふ面白いことであつた。幸いに、黒田も篠原も

怪我もせず戻つてきて、是で宜しいと云うようなことであつた。」

その四境戦争も、七月には將軍徳川家茂が大坂城内で病死したので、八月には幕府は將軍の死去を理由として一方的に止戦を告示した。なお、暮れも押し詰まつた同年十二月二十九日には、孝明天皇が崩御された。

めまぐるしい辞令

四境戦争も終結し、仮初かりそめの平穩な日々となつた慶応三年六月、小田村は世子毛利広封ひろあつ（元徳）の書物掛を仰せつかつた。思うに、敬親公は毛利家の将来を託する世子の教育を、信任厚い儒学者の小田村に依頼されたものと思われる。しかし、時代は未だなお流動的で、小田村の手腕を必要とした。

九月十八日、小田村は遊撃軍副総督を命じられ、遊撃軍の屯所高森に赴任した。当時の遊撃軍は定員三三〇名で、奇兵隊に次ぐ兵士を抱えた大軍勢であつた。しかし、

三日後の二十一日、副総督の職を解かれて、毛利内匠の大坂派遣の随行を命じられた。しかしその辞令も取り止め、同月二十五日には藩の奥番頭に拔擢された。同日、藩命により名前を楫取素彦と改名した。

十月十四日、藩主毛利敬親父子の元に討幕の密勅（実偽勅）が届き、同文の内容で鳥津藩主父子の元にも密勅がもたらされた。奇しくも、同月同日、將軍徳川慶喜は大政奉還を朝廷に願ひ出していた。

慶応三年（一八六七）九月、楫取が就任した奥番頭職は、藩主に最も近接して勤務する役で、殿中の諸事一切を統括し、他藩では専ら「側用人」と称する重要な役職であった。特に藩主敬親の信頼がないと勤まらない役職で、敬親公が如何に楫取を重用したかを示す役職でもあった。

十一月、楫取は三たび太宰府に五卿を訪ね、出兵・上京について報告し長州藩の立場を説明した。折り返し帰藩すると諸隊参謀として三田尻御船倉を出帆して西宮に着陣し、十二月には諸兵を率いて入京すると、朝廷から

藩主父子並びに支藩主のいずれもの復位が認められ、入京の沙汰が出された。

徴士参与を辞任し、山口藩の権大参事に

慶応四年（一八六八）正月三日から六日にかけて、京都南部の鳥羽・伏見を舞台に、薩長を中心とする新政府軍と会津、桑名両藩を中心とする幕府軍が衝突して戦闘が始まり、近代国家誕生のカギとなる戊辰戦争が始まった。

楫取は当時山口藩を代表して禁中に勤務し、徴士参与ちようしさんよに任命された。しかし、藩主の信任篤い楫取は徴士参与を辞任し、藩主敬親の駕に従って帰国した。楫取は今や藩主の側近中の側近として存在し、翌年には奥番頭を兼ねて山口藩の権大参事に就任した。

藩主敬親の逝去・隠棲

明治四年の三月二十八日、長年に亘って全幅の信頼を頂いた名君毛利敬親公が逝去された。楫取素彦の手廻組

としての勤務中は勿論、日常生活に於いても大きなウエイトを占めていた主君敬親公が逝去され、素彦の中心には大きな空洞が開いたに違いない。

思い起こせば、安政六年（一八五九）、御手廻組に抜擢され、敬親公の側儒役となつて以来約十三年間、陰に陽に常に敬親公の側にあつて、激動の幕末動乱期を敬親公の「懐刀」、或いは「知恵袋」「分身」「名代」として東奔西走した。特に、藩是が「破約攘夷」に転換した際には、敬親公の意向を受けて支藩を含めた長州全域を「勤王」で結束させるために、決死の説得を試み、見事に成功させた功績は多大なものがあり、敬親公の信任は一段と増した。

明治四年（一八七二）七月、明治政府により廢藩置県が断行された。同年三月には敬親公が逝去されて大きな支柱を失ったこともあつて、楫取は家族と共に大津郡三隅村二条窪に隠棲した。

初代群馬県知事に就任

明治五年（一八七二）、楫取は相模国足柄県へ七等出仕の辞令を受けて赴任し、程なく参事に昇任した。転機が訪れたのは同七年（一八七四）、熊谷県の権令に転じ、九年（一八七六）四月には熊谷県令に就任し、八月には同県が群馬県と改められて初代の群馬県令となつた。楫取県令の評価は、教育と産業を二本柱として、群馬県発展の基礎づくりをした。特に教育振興に尽くした業績は大なるものがあつた。

その群馬県滞在中の明治十四年に妻の壽を亡くした。それから二年後の同十六年、久坂玄瑞未亡人の文（美和子）を後妻として迎い入れた。この美和子がNHK大河ドラマ「花燃ゆ」の主人公である。

国政時代

明治十七年（一八八四）群馬県知事を辞して元老院議員に就任した楫取は、同十九年には高等法院陪席裁判官に任ぜられ、翌年には長年の勲功に対して男爵に叙せられ、貴族院議員に当選して錦鶏間祇候きんけいのみせこうとなつた。

明治三十年（一八九七）には皇女降誕御用掛に就任し、貞宮御養育主任として重責を務めたが、同三十二年貞宮多喜子内親王殿下が薨去された際には葬祭喪主を仰せつかり、立派に祭主を務めた。

大正元年（一九一二）郷里の山口県三田尻で逝去した。享年84歳。